

原 著

「スピリチュアル」の意味 —聖書テキストの考察による一試論—

梶 原 直 美

要 約

「スピリチュアルケア」が耳慣れた用語となって久しい。WHO では健康理解としてそれまでの身体的、精神的、社会的に留まらず、霊的という言葉も加える議論がなされたことはよく知られている。この場合の霊的とは何を指すのか。スピリチュアリティに関する研究は近年盛んになりつつあり、様々な定義づけが提示されている。本稿は、実践的な様々な現場でのケアを前提に、スピリチュアリティの語源を、その背景にあるキリスト教に求め、旧約聖書に遡って文脈や語義の分析を行い、意味を問うた。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. スピリットに相当するヘブライ語のルーアハは始原のエネルギーであり、神との関わりのなかで、神に従って、完全に新しい世界さえ作り出すダイナミズムを有するものであった。
2. 物質で造られた体に、スピリットと同様の性質を持つ神の命の息ネシャマーが入れられたことで、人は自分の命を生きる存在となった。
3. 魂とは、体も含め、命を吹き込まれて生きることとなったその人の全存在を指す。
4. 人間も動物も、神から命の息を与えられた生命体である。
5. スピリチュアリティはすでに内在するものであり、人の存在を根底から支えている。

われわれ人間が超越者なる神との関わりのなかでスピリチュアルな存在とされたように、互いの関わりにおいてもまたその同じもので繋がっていけるということは、スピリチュアルケアを実践するさいに、安心と希望を与えるのではないだろうか。

1. はじめに

「スピリチュアルケア」という語が耳慣れた用語となって久しい。それ以外にも「スピリチュアルペイン」「スピリチュアルアセスメント」などのように「スピリチュアル」という語はしばしば用いられる。

人間を理解するとき、たとえばWHOでは健康理解として、それまでの身体的、精神的、社会的に留まらず、霊的という言葉も加え、“Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and...”¹⁾に改める提案がなされたことはよく知られている。この場合の霊的とは何を指すのか。遡って1990年、同じくWHOがスピリチュアルということについて、「人

間として生きることに関連した経験的一側面であり、身体感覚的な現象を超越して得た体験を表す言葉」であり、「霊的は宗教的と同じ意味ではない」と理解していたことも指摘される²⁾。

とくに医療・保健・福祉の現場で多く用いられているこれらの用語をどのように理解すればよいのか、これまでもたびたび、その定義に関する研究がなされている。繰り返し定義づけの試みが必要であるということは、つまり十分に明確な定義づけが困難であるということの意味する。その理由のひとつには宗教性とスピリチュアリティとの混同が指摘され、あるいはそれを混乱と見なして問題提起する見方もある^{3)†1)}。また、この外来語である「スピリ

神戸女学院大学（非常勤講師）

（連絡先）梶原直美 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学

E-mail: lindenbaum07@gmail.com

「スピリチュアリティ」が日本で理解された場合、欧米におけるその意味との差異が生じていることも指摘されている⁴⁾。たとえば、内山は、H.S. ホイマンの例から、米国においてはスピリチュアルの意味が特定の信仰心というよりも奉仕、自己犠牲、無償の愛といった要素として理解されていることを指摘し⁵⁾、タカハシもまた米国において同様の傾向を指摘している⁴⁾。

本稿では、これまでに提示されてきたスピリチュアリティに関する定義の幾つかに触れた後、スピリチュアリティという語の本来の意味について考察する。その語意と現在の内容に隔たりがあったとしても、そもそもスピリチュアリティが人間のなかでどのように捉えられ、考えられていたのかをそこから学び、スピリチュアリティ理解に共通するものを提示し得る可能性があるからである。ここではその英語の語源をその言語の背景にあるキリスト教に求め、なかでも旧約聖書に遡って文脈や語義の分析を行い、意味を問う。そして、実践的な様々な現場でのケアを前提に据えながら、スピリチュアリティという語の持つ本質の意味に照らして、スピリチュアリティに関する一試論を提示したい。なお、そのさいの資料はすべて文献による。主には、スピリチュアリティに関する昨今の文献、聖書テキスト、聖書解釈に関する文献等を使用する。

2. 医療福祉分野において使用されているスピリチュアリティの定義

まず最初に、これまで数多く提示されてきた定義ないしは言説のなかで、分野が重複しない研究のなかから、幾つかのものを挙げておきたい。

神学者であり日本におけるスピリチュアルケア研究と実践の推進者である窪寺は、「スピリチュアリティとは、人生の危機に直面して『人間らしく』『自分らしく』生きるための『存在の枠組み』『自己同一性』が失われたときに、それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能である」と述べている⁶⁾。この定義はスピリチュアリティを論じるうえで、しばしば引用されている。

死生学研究の立場にある藤井は、スピリチュアリティを、どんな状態でも自分をよしとでき、生きることに根拠を与えるもので、人間存在の根源を支える領域であると見なしている。そしてここには宗教性が含まれている⁷⁾。

社会福祉分野の研究では、スピリチュアリティに関して木原が、「人間の核となるもの」であり、「精神と身体とを結合させるもの」、「精神とは区別して

用いられ、精神、物質、あるいは肉体を包括するもの」と見なしている⁸⁾。

医療関係者としては、看護学領域のとくに高齢者のスピリチュアルケア研究に関わる三澤は、スピリチュアリティを「その人にとっての究極的な意味や信念、価値をもって生きる生き方である」と定義している⁹⁾。緩和ケア医療に携わる医師の種村は、「生きることに對して目的や意味を与えるもの」「人生に対する心構えや態度をつくるもの」と要約している¹⁰⁾。看護学で同じく緩和ケアに携わる河は、既存のスピリチュアリティ研究について、「物質と異なる存在、生きるエネルギーや生きる意味に関係するという本質において共通している」と分析し、個人のスピリチュアリティについて「何を拠り所として求めるか、その対象との関係性はどれくらい統合されているかによって特徴づけられる」と述べている¹¹⁾。そこから、スピリチュアリティを「個人の生きる根元的エネルギーとなるものであり、存在の意味に関わる」ものであり、ゆえに「そのありようは、個人の全人的状態、すなわち、個人の身体的、心理的、社会的領域の基盤として各側面の表現形に影響をおよぼす¹¹⁾」ものという暫定的な定義を示している。

これらはその研究のほんの一部であるが、スピリチュアリティということをめぐる定義づけは、その機能、存在様式、存在領域など、捉える基準も異なるために多様な表現となっていることがわかる。それは、ここに示された定義の多様性を支える視点がそれぞれ違うことに起因するであろう。つまり、スピリチュアリティをもって何にアプローチしようかという、領域の違いに基づくものであると言える。まとまりのある統一体としては理解されにくいそのような多様性もしくは多面性は、まずそれぞれの立場から見える側面を受け止めて理解することが重要であろう。医療・保健・福祉の立場から、心理・トランスパーソナルの立場から、教育の立場から、社会政策の立場から、宗教の立場から、それぞれが関心を向け焦点を当てる側面は少しずつ異なるからである^{12,13)†2)}。しかし、その用語が意味する最も核となる部分を共有できるとすれば、お互いの目指す大切な事柄が別の領域において共時的かつ相乗的に実現される可能性を高めることができる。それは、たとえばスピリチュアルケアといった実践において具体的な方向性を与えてくれるであろう。

なお、欧米においては、日本より早くから福祉・医療や社会的な活動のなかにスピリチュアリティの概念が意識され研究の対象とされた。ヨーロッパにおいては、とくにキリスト教の影響下で霊性が重視されたが、その研究は17世紀ころから、神との合一

や超越意識の探求にむけて、なかでもカトリック神学において展開されたことが指摘される¹⁴⁾。米国では現在、とくにトランスパーソナルないしは統合心理学の第一人者である K. ウィルバーが意識に関する研究を牽引している。彼は、至高体験あるいは意識変容、意識発達の最高段階、独自の意識発達段階、愛や信頼などの精神的態度、という四領域においてスピリチュアリティを定義している¹⁵⁾。臨床心理学者 D.N. エルキンスもまた、意識への積極的なアプローチを行うが、彼はスピリチュアリティについて「魂を養い、霊的側面を発達させるプロセスおよびその結果」と説明している¹⁶⁾。

このように「スピリチュアリティ」の語の持つ意味は多様に理解されるが、以下の項目では、現在多方面で使用されている「スピリチュアリティ」ないしは「スピリチュアル」という語が、どのように使用されているのかについて簡単に述べ、聖書における起源に遡って考察を行う。

3. その語が使用された経緯

「スピリチュアリティ」や「スピリチュアル」という語が現在のような意味で使用され始めたのは、欧米では1980年代、日本では1990年代からであるとされる¹⁷⁾。また、研究の対象としては、欧米において1980年代には数えるほどしか提示されていなかったものが2000年代には15倍の210件に増加し、2008年には一年間で466件の研究が提示されたのに対し、日本では「スピリチュアリティ」という用語が深く浸透し始めたのは2000年半ばからであり、言葉自体の意味がいまだ確立されていないことが指摘される¹⁸⁾。この背景には、1995年以降、ホスピスケアや死生学の影響によって「スピリチュアリティ」という語が普及し、2000年にはそれらとは異なる出自を有するセラピー文化としての「スピリチュアリティ」が大衆文化として急速に発展したことが挙げられよう¹⁹⁾。

また現在、「スピリチュアリティ」ないし「スピリッ

ト」は、しばしば「魂」として理解されていることにも気づく^{20,21)†3)}。スピリットは魂を指すのであろうか。では魂とは一体何なのだろうか。

このような問いも含めて、スピリチュアリティの用法や語義を分析することによって、現代における意味を模索する。

4. 聖書におけるスピリチュアリティ

たとえば窪寺²²⁾は、聖書にスピリチュアリティの定義を探求し、創世記から「人間の生を支えるもっとも基本的要因」、「神との関係」と述べている。そしてスピリットを、神が与えた「自己認識」の手段であり、人間が人間として生きるときの神との関係を示す（ここにおいて人間は固有性を示す）ものとみなしている。また、神とのこの関係を示すのがスピリチュアリティであり、これは人間が生きるための枠組み（位置・場・空間）を与え、つまりは安全、希望、人生の意味・目的等を与えるものであると説明している。

4.1. 「スピリット」

ここでは、異なる言語間で変換された用語を辿り、テキストの文脈に迫りながら、スピリチュアリティを考察する。

スピリチュアリティという英語はスピリトゥス (spiritus) というラテン語に由来し、このラテン語は、スピロー (spiro) という、呼吸する・生きている、靈感を得る、風が吹く、などの意味を持つ動詞に基づき、呼吸や息、いのち、意識、靈感、風、香り、そして霊や魂を意味する。この spiritus は聖書の歴史のなかで、おもにギリシャ語のプネウマ (πνεῦμα) からの翻訳となっており、その語はヘブライ語におけるルーアハ (רוח) およびネシャマー (נשמה) に対応している。ここでは、聖書の出典としては最も古く、人間存在の根拠が記されている旧約聖書に遡って考察したい。

なお、以下に出てくる用語について表1に提示し

表1 ネシャマーとネフェシュに関する用語の変遷と語義の内容

	日本語	(命の)「息」	語義	(生きる)「者」	語義
古 ↓ 新	ヘブライ語	ネシャマー (≒ルーアハ)	息, 風 (霊)	ネフェシュ	欲望, 喉, 生命, 魂
	ギリシャ語	プノエー (≒プネウマ)	息, 風	プシュケー	息, 命, 魂
	ラテン語	スピリトゥス	呼吸, 霊, 気質, 元氣, 風,	アニマ	そよ風, 息, 活力, 霊, 精神, 心
	英語	スピリット	精神, (聖) 霊, 活気	ソウル	魂, 精神, 気迫

た。まず、われわれが使用する日本語訳²³⁾を最上段に示し、その語がどの語に対応して使われてきたのかを同じ列の枠内下方に記載した。上段から下へ、古い順にヘブライ語²⁴⁾、ギリシャ語訳²⁵⁾、ラテン語訳²⁶⁾、英語²⁷⁾(RSV訳)のそれぞれの用語について、右の枠にはおもな語義を提示した。

4.2. 「ルーアハ」

まず、「ルーアハ」は、旧約聖書の創世記において重要な用語となっている。創世記1章では天地創造のストーリーが展開されるが、その原初の状態から、神の語りかけによってこの世が造られる。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であった。闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」(創世記1, 1-2)

ここには、天地創造以前からの様子が描写されている。

「地」というのは「天」に対するものであるが、これから創造されていく世界の土台になるものである。しかしその地は混沌としたものであり、原語に近く読むならば、無秩序で実体がなく、どこまでも闇が支配しているような状態であった。ここには何の動きもなく、荒廃し、いのちのかけらも感じられない。何の関わりも、関わる手がかりさえも存在しない。

しかし、ここで唯一動くものがあつた。それが神の霊であり、「ルーアハ」である。この動きは、実体のない、周囲の完全な静止に対して、大きな力を内在させている表現と理解することができる。つまり、死のような世界のなかに、まさに何かが生じようとしている、生じる可能性に満ちた状態である。神の霊は、ただ存在するだけでなく、活動のダイナミックな力として、周囲に対して働きかけを起こす²⁸⁾。この「ルーアハ」は「霊」のほか、「風」や「息」も意味する。これらの意味に共通するものは、それ自体はつかみ得ないが、ある実体を生かす力を持ち、そこから自然に発散されてくる性質を持っていることであると理解される²⁹⁾。ゆえに、ある種の力として機能的にでない把握しがたい存在であることがわかる。

「神は言われた。光あれ。こうして、光があつた。」(創世記1, 3)

霊がうごめくなか、神の言葉によって、世界が生じた。ここで唯一能動的、自発的であつたのは神で

ある。そして、自らの意志によって、光を生んだ。ここで言われている前述の「神の霊」という言葉が示す、「神」と「霊」との関係は明確ではない。しかし、霊の所有者であつた神が自らの意志による決断を下し、その決断を言葉によって闇のなかに投げたとき、言葉どおりの変化が生じた。その世界の生起は偶然ではなく、人間を超える至高者の、対象の世界に対する確かな意志による。神は、対象との関わりの中かで、意志を表した。霊は、自らの性質を変えることなく、神の言葉の先にある対象に向けて影響を及ぼし、実際に変化を生じさせる役割を果たす。霊の働くエネルギーの方向は、その所有者の意志によって決まる。

この先の内容も、変化は神の言葉によってのみ生じている。創世記のこれらの記事は、捕囚という困難な状況を生きたイスラエルの信仰が土台にある。この人々は、バビロニアの神々の力に打ち碎かれるような状況の中かで、イスラエルの神の力を根拠づける。神への信仰を疑いたくなるような病、貧困、孤独、見捨てられ顧みられないような現実を前に、彼らは、この神への信仰が誤り得ないことを示している³⁰⁾。むしろ、そのような危機的な状況の中かで、彼らの信仰は強まった。彼らがこのテキストに投影しているのは何だったのか。ブルックマンは、ここで神の語りかけによって、世界が再定義されたことを指摘している³⁰⁾。それは、神の創造する力への信仰であり、創造の内容に対する信頼である。その、まったく新しい世界を存在させ得る力を、神の霊ルーアハは自らのうちに内在させている。

4.3. 人間の創造

創世記の記事には資料の違いによって内容が重複している部分があるが、土から人をつくる内容は、2, 4b から3, 24までのまとまりのなかに置かれている³¹⁾。

「主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹きいれた。」(創世記2, 4b-7)

ここでは先のような宇宙観は退き、人間に焦点があてられる。たとえば、それまで「天と地」とさされていた語も、「地と天」といったように逆転する(2, 4b)。

ここの文章を読むと、その展開には不自然さが感じられるが、その理由のひとつには、関心が地と人へと偏っていることが挙げられるであろう。「地と天と造られた」という、創造のなかでも最も始原的な出来事が起こったとき、当然そこにはまだ何も存在しなかったはずである。しかし、「地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった」こと、そして「土を耕す人もいなかった」ことがあえて述べられる。ここにおいて、関心は「地」とそこにある「土」に向かっている。旧約聖書の信仰にとって、土地は単なる財産のひとつではなく、神が与えたもう、神の約束の成就としての特別な所有物として意識されている³²⁾。そして、現在の地の干からびた状態を、「地上に雨をお送りにならない」という神の行為の結果であるとして示している。つまり、この地は完全に神の影響下にあり、神に依存し、その主体は神なのである。雨や水は命を養うものとして理解されるが、雨がなかったという記述は、このヘブライの置かれた状況を考えると理解しやすい³²⁾。なお、「土を耕す人」という表現のなかで、土と人とはすでに関連づけられているが、それだけに留まらないことが後に述べられる。

乾ききって命を養う意志がないように思えるような状況、しかもそれを神が許すような状況のなかで、「しかし」と状況の異変に注意が喚起される。常識的に考えて予想していた雨というかたちではなく、地の下から湧いてくる水によって、地は潤された。そして、その前後の脈絡を関連付けることなく、理由に注目するわけでもなく、突然、人間を創造する神の行為が、極めて短く伝えられる。人間には神のわざの脈絡や理由を明示することはできない。それよりも、確かにそこに存在するのは神の行為の現実なのである。

神はこの土から人を形づくった。神に全く依存している土を材料に、神の行為によって、人が形成された³⁰⁾。日本語訳では「土の塵」となっているこの言葉は、「塵」という語からしばしばその卑小さが連想されるが、本来は土のなかの細かい粒子を表す言葉なのであり^{33)†4)}、水を吸うと粘度のようにこねることのできる状態が示されていると考えられる。ヘブライの人々にとって存在の座とも言える地の一部であり、神に完全に依存する存在であった土(アダマ)、しかも、砂のようなものではなく水をもって形づくりにふさわしい細かい粒子によって、人(アダム)が形成された。これが人間の身体となった。

4.4. 「ネシャマー」と「プノエー」

このいわば粘土細工に、神は命の息を吹き入れる。

身体という存在を与えられた人間は^{†5)}、神から「命の息」を吹き入れられることによって「生きる者」となった。この「息」は「ネシャマー」(נִשְׁמָה)というヘブライ語で、前述の「ルーアハ」とほぼ同じ語義を持ち、息や風を意味するが、「ルーアハ」のほうが汎用されていたようである。

そして「ネシャマー」はのちに、「プノエー」(πνοή)というギリシャ語、および「スピリトゥス」というラテン語に翻訳されている。一般的に「霊」および「息」や「風」を意味するギリシャ語は「プネウマ」であるが、プノエーもプネウマも語源は同じ「プネオー」(πνέω)という動詞であり、ここには「風が吹く」や「息をする」といった意味が含まれる。「プノエー」にも風や息を意味していたことは確認できるが^{34)†6)}、「プネウマ」に比べて圧倒的に使用頻度が少なく、「霊」という意味での使用を確認するのも困難である³⁵⁻³⁷⁾。ただ、この語は教父の時代、「風」「息」のほかに、人間の(不死の)霊や神の霊、さらには魂をも意味するようになっていく³⁸⁾。

旧約の時代と新約の時代、創世記2,7における「命の息」と和訳されたこの語「ネシャマー」が、「霊」としてはそれほど強い意味を持っていなかったというのは、何を意味するのか。ここには二つのことが考えられる。

「プノエー」は創世記7,22においても「命」(ζωή)とともに、「命の息」として、この語が使用されている。7,22は、人間でなく命を与えられた動物たちに言及されている箇所である。ここから考えると、息の性質よりも、命を持たなかった物体が息によって命を得た、という変化のほうに焦点が当たっていたことが考えられる。息にはその力が内在し、それを与えたのは神であった。

また、「プノエー」は旧約聖書では、神の息吹も含め、動きのある息として、生命力を示すものを共通して表現している。なかでも、ヨブ33,4には、「神の霊(プネウマ)がわたしを造り、全能者の息吹(プノエー)がわたしに命を与えたのだ」という一節が見られる。前後の文脈から鑑みると、ここでの霊とは明らかに創造に関わった神の霊のことであり、息吹とは命の息のことを指している。また、新約聖書においては使徒言行録で、聖霊が降るときの強い風を表す語として使用されている。つまり、「プノエー」には息のエネルギーを表現する傾向が伺え、そこには神や神の霊の性質もまた内包されている。

このようにして、土から成る物質的な体を持ちながら、そこに神の息吹が入ったとき、その存在は生きる者(ネフェシュ)となった。この「ネフェシュ」

は、生命や活力、生き生きとした全人格を指すのであって、本来は魂に結び付けられてはいなかったことが指摘される²⁸⁾。しかしのちに、これは魂と理解されるようになる。

ここから言えることは、人は、自分に吹き込まれた命の息によって体も含めてその全存在で生き生きと生きるものとなり、この存在のことを魂と理解するようになる。つまり魂は、体と二元対立するものではなく、体というこの世界のあり方に等しい物質的な個体のなかに、神の息が与えられることにより生かされるようになった、生命体の存在そのものを表しているということである。

5. 旧約聖書のあとの時代におけるスピリチュアリティ

言語はあらかじめ決めたルールに従って正確にカタゴライズされるのではなく、時代や状況のなかで徐々にその形態や意味を変化させていくため、意味に対応する明確な構造を提示するのは容易ではないが、曖昧さを含みながらもその傾向を追うことで、その語が意味しようとする中心的なことは抽出できる可能性がある。以上の論述のなかでは、聖書に遡って「霊」の語義を分析すると同時に、魂の意味についての片鱗を確認することとなった。

新約聖書のなかでも語義の理解は変化する。そこにおいて人間は体・魂・霊から成るものと理解され(1テサロニケ5, 23)、この理解はそれ以降、引き継がれる。また、霊は、たとえばその「実」を結ばせるもの(ガラテヤ5, 22)として、それを与えられた人間の行為や生き方の結果について言及する傾向がみられる。このような傾向は、冒頭で述べたような、米国において指摘された霊を善行と結びつける考え方に繋がっているかもしれない。

ここにギリシャ的伝統も影響を与える。ヘブライが自然と霊的なものを両立させるのに対し、プラトンは両者、たとえば善なる霊性と悪なる身体性とを切り離そうとした。しかし、魂について、それが本来完全に清く、体から解放されることで完全性を回復する、といった古代ギリシャにおいて受け入れられていた捉え方は、旧約のみならず、新約のなかにもみられない³⁹⁾。むしろ、語義における観念のなかに、体を通して与えられる息とそこに実在する霊の存在とが、共存するかたちで備わっていることが確認された。

この神の霊ないし息吹は、神の言葉とともに働く。神が「光あれ」と言うとその言葉は現実となる。つまり、神の息が吹き込まれるとそれは現実に生き始める。ヘブライにおいて、スピリットは、無秩序で

空しい人間の生に語りかけ、それをとおして人間の世界に秩序や意味、目的を授けるものであった。

6. スピリチュアリティの可能性

以上のようなものとしてスピリットを理解するとき、われわれが漠然と人間の内側に据えるスピリチュアリティもまた、スピリットの性質を表しているものと理解される。つまり、スピリットとは神の側から人間に与えられ、それによって人間が生きるものとなるところのものであり、人が生命体として存在するその根底にある力、命を支えている力である。

ここから考えると、人間の体や精神は常に変化するものであるが、スピリチュアリティは、それらを根底において支え、養っている動的な実体であると言える。しかし、これ自体が成長したり退化したりするというものではない。体や精神が極めて脆弱であったり危機に瀕したりしたときに、その生命体を、身体的に、精神的に、支えるものなのである。体や精神の危機のさい、それらが通常通りには機能できなくなったその裂け目から、常にそこで働いていたスピリチュアリティが自覚されたり、あるいは体や精神が影響を及ぼし得なくなったとき、その隙間からスピリチュアリティの影響力を感じることができると考えられる。

スピリチュアリティがこのようなものであるなら、危機的状況はスピリチュアルな側面を危機に陥れるものではなく、むしろ、自分を支えてきた超越的な力に気づく機会になり得るものであることがわかる。ゆえに、「スピリチュアルペイン」とは、スピリットを失う危険性のある痛みではなく、ましてやスピリットそのものの持つ痛みではなく、スピリチュアルなものによってしか支えることのできないその人固有の痛みと言い表すことができよう。そして「スピリチュアルケア」とは、対象を問わず、スピリチュアルな側面の発動を促すケア、つまり、与えられたいのちを、その人がその生命力のかぎりに、主体的に生きることができるよう支える援助であると理解し得る。そのなかに、生きる意味の獲得や満足など、具体的な様々な要素が含まれる。このとき、ケアの提供者もまた、自らのスピリチュアルな側面に影響を受け、ケアを提供しながら、スピリチュアルなエネルギーを享受することができる。それは実際に、喜びややり甲斐や、あるいは悩んだり心を痛めることにおいてさえ、すでに体験されているものなのではないか。

7. おわりに

実際の臨床の場でスピリチュアルケアというとき、そこには今現在、すでに様々な配慮や創意工夫がなされている。本稿ではそのケアの内容そのものに関する考察は行っていない。また、スピリチュアルやスピリチュアルケアの範囲を明確にしてそれ以外のアプローチを排除することも目的ではない。ただ、方向性としてどこを向き、何を目標せばよいのか、何が必要で、どこにアプローチすればよいのか、といったことを明確にするうえで、今回のこのひとつの角度から、足元の土台を確認することが必要であった。

本稿において、ケアを必要とする側にも提供する側にも、すでにスピリチュアリティが備わっていることを確認した。それは、それによって対象者が危機を一人で乗り越えられるという意味ではない。霊は人間に対して非常に大きな影響力を持ち、それが生かされるのは対象との関わりにおいてであった。

人間は体の面でも心の面でも危うさを持つ。スピリチュアリティ自体は目に見えるものではないが、触れることのできる体と見えない心の両方を含む全人格、魂に対して、既に与えられている息を吹き入れることを可能にさせるものであると言うことができよう。

なお、島藺は、現代社会の価値観と現実にとって必要な、これからの新しいスピリチュアリティについて提案し、宗教なかでも仏教にその可能性を示唆している⁴⁰。ここでは時代を遡ってキリスト教の正典からの語義による研究を行ったが、それは聖書に示されている信仰の抽出といった側面も含み、やはり熟考を迫られる事柄も少くなかった。今回は新しい時代に向けての提案にまで至ることはできなかったが、今後の課題として念頭に置いておきたい。

本研究は、科研費基盤研究(C)課題番号25380820の助成を受けて行われたものである。

注 釈

- † 1) たとえば松島は、宗教性をも対象とし、つまり宗教集団における信徒を検討することにより、スピリチュアリティの様相を捉える工夫も必要であることを述べている。
- † 2) 小藪、白岩らは、スピリチュアリティの定義を、その提唱者ならびに領域とともに、一覧表によって提示している。榎尾もまた、スピリチュアリティの定義を収集し、カテゴライズを試みている。
- † 3) たとえば、長島は「奥深い魂の不安や心の闇、心の苦痛や魂の叫びを『スピリチュアル・ペイン』と呼ぶ」とし、江口、落合らは「本研究では、スピリチュアルを Spirit『魂』や『息』『聖霊』など、人間に生きる意味や目的を与える根源的なものとして使用した」と述べている。ほかにも多くの研究において、このようにスピリチュアリティと魂とを同一視する理解が見られる。
- † 4) ギリシャ語では「地」(ἡ γῆ)のみ、ラテン語では「土の泥」(limus terrae)となっている。また、塵と訳されているヘブライ語の ophr という音は、3, 19b との辻褄合わせであるとの理解もある。
- † 5) 人間だけでなく、動物に関しても言及されている。Cf. Gen. 2, 19. また、「その鼻に命の息(ネシャマー)と霊(ルーアハ)」があったものとして、鳥、家畜、獣などに言及されている。(Gen. 7, 21-22) また、コレヘトの言葉には「人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊(ルーアハ)をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。」(Coh. 3, 19) という理解も見られる。
- † 6) ただ、「プネウマ」には力やエネルギーの概念が含まれ、「プノエー」にはそよ風のような平和で穏やかな息という違いも指摘される。これはアレクサンドリアのフィロン (MONDÉSERT Cl ed and trans: *Les Oeuvres de Philon d'Alexandrie*. vol. 2. Paris, 1962.) の考えに負っている。しかし、新約聖書で用いられる「プノエー」には強風を表現するものもあり、この研究の結論に関して蓋然性は確認できなかった。

文 献

- 1) 厚生労働省：WHO 憲章における「健康」の定義の改正案について。1999。
http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1103/h0319-1_6.html
- 2) 世界保健機関編、武田文和訳：がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア。初版、金原出版、東京、1993。(WHO: *Cancer pain relief and palliative care*. WHO Technical Report, Series No. 804, Geneva, 1990.)
- 3) 松島公望：日本人高齢者における宗教性およびスピリチュアリティに関する実証的研究の可能性を探る。老年社会科学, 31(4), 509-514, 2010.
- 4) Takahashi M：スピリチュアリティ研究の動向-21世紀の心理学における課題と可能性。心理学ワールド, 59, 13-16, 2012.
- 5) 内山源：健康教育と Spiritual Health (その一)。茨城女子短期大学紀要, 30, 108-75, 2003.

- 6) 窪寺俊之：スピリチュアルケア学序説。初版，三輪書店，東京，2004.
- 7) 藤井美和：スピリチュアリティの本質－死生学の視点から－。老年社会科学，31(4)，522－528，2010.
- 8) 木原活信：対人援助の福祉エートス ソーシャルワークの原理とスピリチュアリティ。MINERVA 福祉専門職セミナー10，初版，ミネルヴァ書店，東京，2003.
- 9) 三澤久恵：いまを生きる高齢者のスピリチュアリティとそのケアを求めて－老年看護の視点から。窪寺俊之監修，スピリチュアルケアの根底にあるもの－自分が癒され，生かされるケア。初版，遊戯社，東京，100－127，2012.
- 10) 種村健二郎：死ぬ苦しみからの解放とスピリチュアルケア。窪寺俊之監修，スピリチュアルケアの根底にあるもの－自分が癒され，生かされるケア。初版，遊戯社，東京，129－158，2012.
- 11) 河正子：スピリチュアリティ，スピリチュアペインの探求からスピリチュアルケアへ。緩和ケア，15(5)，368－374，2005.
- 12) 小藪智子，白岩千恵子，竹田恵子，太湯好子：スピリチュアリティの認知の有無と言葉のイメージ－緩和ケア病棟の看護師，一般病棟の看護師，一般の人，大学生の特徴－。川崎医療福祉学会誌，19，59－71，2009.
- 13) 櫻尾直樹：スピリチュアリティ革命－現代霊性文化と開かれた宗教の可能性。初版，春秋社，東京，2010.
- 14) Baier K : *Handbuch Spiritualität. Zugänge, Traditionen, Interreligiöse Prozesse*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 2006.
- 15) Wilber K : *Integral Psychology : Consciousness, Spirit, Psychology, Therapy*. Shambhala, Boston, 2000.
- 16) Elkins DN. : *Beyond Religion. A Personal Program for Building a Spiritual Life Outside the Walls of Traditional Religion*. The Theosophical Publishing House, Wheaton, 1998.
- 17) 安藤治，結城麻奈，佐々木清志：心理療法と霊性－その定義をめぐって，トランスパーソナル心理学。精神医学，2(1)，1－9，2001.
- 18) Takahashi M : 老年学におけるスピリチュアリティの理論的研究の歴史と動向。老年社会科学，31(4)，502－508，2010.
- 19) 島蘭進：スピリチュアリティの興隆。初版，岩波書店，東京，32－34，2007.
- 20) 長島世津子：スピリチュアルケアと魂の教育について。白百合女子大学研究紀要，42，21－42，2006.
- 21) 江口富子，落合宏，塚原節子，上野栄一：看護師のスピリチュアルケア測定尺度の開発。富山大学看護学会誌，10(1)，15－27，2011.
- 22) 窪寺俊之：スピリチュアルケア学序説。初版，三輪書店，東京，2004.
- 23) 聖書（新共同訳）。日本聖書協会，東京，1992.
- 24) Rudolph W and Prüger H eds : *Hebraica Stuttgartensia*. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1984.
- 25) Rahlfis A ed : *Septuaginta*. Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, Stuttgart, 1979.
- 26) Weber R and Gryson R eds, *Biblia sacra - Vulgata*, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1969.
- 27) Metzger BM ed : *The Holy Bible. New Revised Standard Version with Apocrypha*. Oxford University Press, USA, 1991.
- 28) R. デヴィッドソン著，大野恵正訳：ケンブリッジ旧約聖書註解1 創世記。初版，新教出版社，東京，1986。（Davidson R : *The Cambridge Bible Commentary on the New English Bible*. Cambridge University Press, 1979.）
- 29) J. ギエ著，小平卓保，河井田朗訳：霊，X. レオンデュフル他編。聖書思想事典。三省堂，東京，871－873，1993。（Guillet J et al. eds : *Vocabulaire de Théologie Biblique*. Les Éditions du Cerf, Paris, 1970.）
- 30) W. プルッグマン著，向井考史訳：現代聖書注解 創世記。初版，日本基督教団出版局，東京，1998。（Brueggemann, Walter : *Genesis. Interpretation A Bible Commentary for Teaching and Preaching*. John Knox Press, Atlanta, 1982.）
- 31) 野本真也，越後屋朗，中村信博，水野隆一：創世記。高橋虔，B. シュナイダー監修。新共同訳 旧約聖書注解 I 創世記－エステル記。初版，日本基督教団出版局，東京，23－114，1996.
- 32) W. ツインマリ著，山我哲雄訳：旧約聖書の世界観。初版，教文館，東京，1990。（Zimmerli W : *Die Weltlichkeit des Alten Testaments*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1971.）
- 33) G. フォン・ラート著，山我哲雄訳：ATD 旧約聖書註解1 創世記。初版，ATD・NTD 聖書註解刊行会，東京，1993。（von Rat G : *Das erste Buch Mose - Genesis*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1976.）
- 34) Poirier P-H : Pour une histoire de la lecture pneumatologique de Gn 2, 7 : Quelques jalons jusqu'à Irénée de Lyon. *Revue des Études Augustiniennes*. 40, 1－22, 1994.
- 35) Arndt WF and Gingrich FW : *Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*. The University of Chicago Press, Chicago, 1957.

- 36) Bauer W : *Griechisch-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen testaments und der übrigen urchristlichen Literatur*. Verlag Alfred Töpelmann, Berlin, 1952.
- 37) 荒井献, H. J. マルクス監修: ギリシャ語新約聖書積義事典 3. 初版, 教文館, 東京, 1995. (Baly H and Schneider G eds: *Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament*. Bd. 3, Verlag W. Kohlhammer GmbH, Stuttgart, 1983.)
- 38) Lampe GWH ed : *A Patristic Greek Lexicon*. Clarendon Press, Oxford, 1987.
- 39) 勝田英嗣: 魂. 東京神学大学新約聖書神学事典編集委員会編, 新約聖書神学事典, 初版, 教文館, 東京, 350-351, 1991.
- 40) 島蘭進: 現代宗教とスピリチュアリティ. 現代社会学ライブラリー 8, 初版, 弘文堂, 東京, 2012.

(平成26年6月4日受理)

The Meaning of “Spiritual”— A Paper on the Texts from the Bible

Naomi KAJIHARA

(Accepted Jun. 4, 2014)

Key words : spirituality, pneuma, ruach, neshemah, soul, Genesis 2, 7

Abstract

Recently we often hear the term “spiritual care”. It is well known that WHO is discussing whether spirituality is to be added or not in the understanding of health. The study of spirituality is becoming popular and the word, spirituality, is defined in various ways. With actual care giving in various places in mind, I seek the origin of the word spirituality from its background in Christianity by analyzing the context and the meaning of the word in the Old Testament and asking what they were saying. As a consequence, the following became clear.

1. The Hebrew word “Ruach” was primordial energy and had the dynamism to create even a completely new world by being obedient to God in relationship with Him.
2. Man came to live his own life by being infused with God’s breath of life, Neshemah, that has the same nature as spirit, into his body made of materials.
3. The Soul refers to the whole being of the person who became a living being filled with life, including his body.
4. Both humans and animals are life to whom the breath of life from God has been given.
5. Spirituality is inherent in all living beings and supports the human being from the core of his being.

Would it not offer hope and peace of mind while giving spiritual care if we are able to connect to each other through spirituality as we became spiritual beings in relationship with God ?

Correspondence to : Naomi KAJIHARA

Kobe College

Nishinomiya, 662-8505, Japan

E-mail : lindenbaum07@gmail.com

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.24, No.1, 2014 11 – 20)